たかさご史話 ⑯

～三菱製紙争議と地域社会～

一九二五年の夏、三菱製紙高砂工場で労働争議がおきた。発端は会社側が従業員組合・工友会をきらい、その活動家を解雇したことにある。この地域にとっては、ちょっとした歴史的事件であろう。

つい先日、わたしは東京の大原社会問題研究所をたずね、同争議にかんする史料を収集してきた。なかでも協調会大阪支所・亀井信幸の手になる報告書が興味ぶかい。

これによると、労働側では「罷業団ノミノ力ニテハ到底資本家ニ対抗スルヲ困難」と自覚し、高砂町会の同志会系議員をとおして、地域の商人層を味方につけようと計画したという。

背景には、当時高砂町会では有産者を基盤とする元老派と、無産勢力を標榜する同志会とが対立していたという事情がある。

また争議は地域経済、とりわけ三菱従業員を顧客とする商店の経営に、深刻な影響を及ぼさざるをえない。それゆえ町民は「一日モ早ク解決セン事ヲ希望」していた。労働側はこうした町民の声に期待したのである。

それにたいし会社側は、およそ一か月にわたり譲歩する気配をみせず、町長や代議士の調停も拒否しつづけた。この姿勢が変化するのは、現地工場長が本社の重役にたいし、強硬方針に固執することの非を、次のように説いたことによってであった。

単ニ罷業団バカリデナク警察側及町民ノ反感ヲ買ヒ、将来ノ立場ニ困難ヲ感ジ、延テハ社員等家族ニ対シテ迷惑ヲ及ス事等モアルニ付、解決シテハ如何

（後略）。

個別の労働争議も、当該地域社会のあり方や地方政界の動向と、密接にかかわることを考えさせられた次第である。

（高砂市史編さん専門委員　三輪　泰史）